

科目担当者氏名		科目担当者連絡先（メールアドレス）	
松田素二		matsuda@socio.kyoto-u.ac.jp	
連絡責任者氏名		科目設置機関名	
松田 素二		京都大学 文学部 文学研究科 / 教育学部 教育学研究科	
授業科目名	科目認定番号	受講者数	
社会学演習II(社会学実習)	KYTa-120601-0	20人	

I. 調査実習に関するコメント

学生が果たした役割や実習全般に対する感想など：

調査の組み立てから報告書の作成まで、つねに細かいコミュニケーションが要請され、学生の調査マネジメント能力を大きく伸ばしていると実感される。熊野灘沿いの漁村、吉野山系の山村に独自の文化と社会組織を育み、今日の過疎化・高齢化のなかで新たな実験を試みているこの地域の人々の実践に学びながら、地域社会に対してどのような貢献ができるのかを考察した。とくに今年度は、東海東南海、南海地震による甚大な被害が想定される地域が、それに対処するためにどのように過去の災害を記憶し将来にそなえる知恵を作りだしているのかについて考察した。

II. 調査の企画・設計（デザイン）

1. 調査のテーマ／領域：

フィールドワーク調査の実際 地域の災害文化/地域社会学

2. 調査の内容／概要：

三重県熊野地方の小集落のもつ災害文化（災害に対する記憶と対処の仕組）が、どのように編成され行政のとりくみと接合しているかを調査した。

3. 調査の範囲／対象（量的調査の場合は母集団と標本数及びサンプリングの方法を、質的調査の場合は対象者選定の理由を必ず記入）：

熊野市全域、御浜町全域から3集落を選定。寺谷（熊野市）、引作（御浜町）、西原（御浜町）。

4. 主な調査項目：

それぞれの「むら」の抱える困難とそれに立ち向かう試み、さらにはその背景にある変化などを学ばせていただきましたが、昨年に引き続き、「3・11」大震災の経験を踏まえて災害の記憶や防災の取り組みにも焦点あてて、「小さな社会」のもつ可能性と困難を考えてみました。

III. データ収集の方法と結果

5. データ収集（現地調査）の方法：

主にインタビュー調査と文書、統計などの収集。

6. 調査の実施時期・調査地・調査員の数：

実施時期：6月30日-7月1日（予備調査・各班1-2名）・9月11日-14日（本調査・全員）・12月1日-2日（補充調査・各班1-2名）、その他学生の班毎に個別調査を実施。調査地：三重県熊野市、御浜町・調査員の数：20名程度（チューター・教職員12名）

7. 収集したデータの量と質への評価（量的調査の場合は有効回収票及び回収率を必ず記入）：

じっくりと長時間をかけて聞き取りをおこなうことを目指しており、全員参加および各班の代表でおこなう予備調査、本調査、補充調査のほか、各班（本年度は3班）の判断で班別調査もおこなっており、聞き取り、史料・資料調査の量・質はかなり高い。なお、プライバシーの問題などに配慮して、分析・表現・公表をおこなう必要も強調している。

IV. データ分析の方法と結果

8. データ分析／解釈の方法：

これまでに蓄積されてきた報告書の分析方法と項目とを継承しながら、100年の変化を適確に押さえるための歴史社会的研究の研究史やライフヒストリー理論などの文献研究を行う。

9. 調査の成果（調査から得られた主な知見など）：

日本近代における過疎中山間地の変容過程をそこに住む者の視点で再検討するとともに、本年度からは地域再生の動きを捉えることを目的としたが、実習生にとって、個々の人々、集落の生活の実践の詳細な聞き取りによってえられる知見と、おおきな近代化論の枠組みとのギャップ、さらにはそこで暮らす人びとの工夫と喜びや困難を実感できたことはおおきな成果であろう。地域における、個人の人生と地域の出来事がクロスするポイントの発見、それぞれの対応の違いなどの発見が、報告書によって次年度の実習生へと伝承されつつ新たな発見へとつながり、それを報告書で伝える喜びを感じることもまた、毎年の成果である。

10. 報告書刊行の予定と概要：

2013年5月刊行（毎年、補充調査終了後に各班があつまり、報告書作成に向けての会議を行う。1月中旬には各班から選ばれた編集委員を通して、チューターに原稿が送られ、チューターと執筆者のやりとりによって原稿が完成する）。報告書のタイトルは『地域にまなぶー第17集』。概要はコミュニティと人々のつながり、過疎の村で暮らす工夫などで、それを各集落別に各班がまとめた。